

# 万葉集卷一—13・14番歌の語るもの

横 倉 長 恒

## 一、「三山歌」の問題点

まず歌をあげよう。万葉集卷一には次のように載っている。

中大兄 近江宮御宇天皇 三山歌一首

13 高山波 雲根火雄男志等 耳梨与 相靜競伎 神代從 如此爾有良之 古昔

母 然爾有許首 虛蟬毛 嬌乎 相格良思吉

反歌

14 高山与 耳梨山与 相之時 立見爾來之 伊奈美国波良

15 渡津海乃 豊旗雲爾 伊理比沙之 今夜乃月夜 清明己曾

右の記載をめぐり、(1)作者は中大兄その人か、(2)「三山歌」とあるが歌われているのは何なのか、(3)「雄男志」とは「男らしい」ということなのか、「を愛し」「を惜し」なのか、(3)つまり、三山それぞれの性別はどうなのか、(4)「高山与耳梨山与 相之時」の「相」とはどういうことか、(5)「立見爾來之」の主語は何か、(6)15番歌は本当に「反歌」と言えるか、(6)言えないとすれば何なのか、(6)左注は何を語るか、(7)「三山歌に託された妻争い」とは、「額田王をめぐる中大兄、大海人の話」なのか、等々多くの問題が問われ、まさに研究者の数だけの結論が出されて来た。

ところで歌を考える場合、当然その形式の中で考える必要がある。不要なりズムは存在しないはずである。その上での言語操作とみるべきだろう。古代人にとって(その原初形態は不明という他ないが)、歌形は既に存在し、共有の価値

感に支えられていた。我々はここからスタートするしかない。だからそこを出発点として言語の躍動を見る。かくて先学の諸成果に待峙する。と前掲の問いの結論ごとく疑問を感じない訳にはいかなくなる。即座に納得し得ない理由を考えてみると、基本的に二つのことが見えて来る。その一つは、《題詞をそのまま信じて、そこをスタートにしていること》、他の一つは、《播磨風土記》揖保郡神阜里の「地名起源譚」を無前提に引用していることである。我々はまず歌が本当に読めるのかどうかから始める必要があるのではなからうか。従って以下一首一首問題になる所を捉え近づいて行きたいと思う。

## 二、13番長歌の語るもの

香具山は 畝傍ををしと 耳成と 相争ひき 神代より かくにあるらし  
古へも 然にあれこそ うつせみも 妻を 争ふらしき

まず「ををし」から入ろう。問題として伝統的なのは「雄々し」の解釈。『古義』のころから「を愛し」が言われ、新しくは「を惜し」が出てくる。この二つをめぐり、三山のそれぞれの性別が論じられて来た。新説が出る度に従来の考え方が整理されているので特にまとめようとは思わないが、この歌自体を考える上にそれらは直接問題にはならないはずだ。なぜなら、この歌は、「三山の妻争い」を歌ったものではないと判断できるからである。それに「三山」が争ふという可能性を考えれば、(i)全てが男(又は女)(ii)二つが男一つが女(iii)一つが男二つが女のいずれかになると見られ、そのどれもが成立して良いはずである。(i)の場合。

『播磨風土記』の「神阜里」起源譚、

出雲国阿菩大神、聞三大倭畝火香山耳梨三山相闘、此欲諫止、上来之時、

「到於此処乃聞關止、覆其所乘之船而而坐之、故号三神卓々形似覆」  
 によって説明しようとするれば、「大倭歌火香山耳梨三山相聞」とあるだけなのだ  
 から、土屋文明氏『私注』の指摘をまづまでもなく、可能性として考えられる。

『私注』が「三山が、別にある一人の妻（恐らく人間の処女）を相争った」として  
 も不思議は無い訳である。(ii)については、茂吉が「原始社会にあって、母権支  
 配の時には、一女を教男が争ふなどいふが、さう公式的に行かぬ。これはもつ  
 と人間両性の本質に立替って説明すべき」と言い、「上代人のあいだの神話・伝  
 説は、人性に最も普遍的なものが多く、特殊なものも少ない」と見、定説化し  
 つつある。『後漢書』倭伝に云う「国には女子多く、大人は皆四、五妻有」る状  
 況では(ii)の折口説(ii)の意味も捨て難い。しかしながら(ii)は(i)の一方のみを  
 認めようとする態度は、結果として一面の真理しか持ち得ないと私は考える。

要は「三角関係」がおさえられればそれで良いはずなのだ。だから男か女かを  
 問う事は『文学』には関わない問題という事になる。

次に「香具山」から「相争いき」の示す所を見よう。まず「大和」に「山が妻  
 争をする」という伝説が存在したことが知られる。早く仙覚抄が「ムカシハ、山  
 川モ夫婦ノ契ヲムスヒケリ」と指摘し、『代匠記』が漢籍中に「川」の争いを指  
 摘しているように、山や川に托して三角関係を語るということは、古代人に普通  
 的なアニミズム的生命観に立脚したものであり、古事記・日本書紀的に考えれば  
 「草木言語する」と考えた時代の思考法として相対視し得る。あるいは柳田国男  
 の言うように、大和平野に於いて、三山の高き争いなどをベースに成立し、「あ  
 の伝説」(大和三山争いの伝説)↑(稿者注)は既にあれだけの略筆を許すまで  
 に、当時の人々には知れ渡って居た」とみることもできる。恐らく当歌の作者は  
 大和三山の争いを十分知って歌い出したと見て良い。それは、助動詞「き」の  
 使用に基づき考え得ることだ。『岩波古語辞典』は「き」について、

意味は「き」の承ける事柄が確実に記憶にあるということである。記憶に確  
 実なことは、自己の体験であるから「き」は「……だった」と自己の体験の記  
 憶を表明する場合が多い。しかし、自己の体験し得ない、または目撃しない事  
 柄についても用いる。例えば、みずから目撃していない伝聞でも、自己の記憶  
 にしっかりと刻み込まれているような場合には、「き」を用いて「……だった  
 そうだ」の意を表わした。

と云う。確かに、人麿歌17番歌など「天地の 初めの時 久方の 天の河原に  
 八百万 千万神の 神集ひ 集ひいまして 神分り 分りし時に……」の「分り

し時」などはそのように考えないと解釈し得なくなってしまう。だからそのよう  
 に見る限り、作者の意識の中には三山争い伝説が客観的に対象化されて存在し  
 たと見る事ができる。

次に「神代より」から「妻を争ふらしき」までを見てみる。伊藤藤氏は、「意  
 味的には」と断った上で「神代よりかくにあるらし」と『古も然にあれこそ  
 うつせみも妻を争ふらしき』とのどちらかを欠いても変化がない」と云うが本当だ  
 ろうか。伊藤氏が当歌をもって「三山歌」なのだとし、見方を誤った根本はど  
 うやらここにある。詩の言葉が無視した。

「神代」とはこの場合「三山争いし時」を指しているのに違いない。「古」  
 とは「人間の時代になってからの古層」を指すのだと思う。「古の三角関係」は  
 例えば「影姫物語」に於ける、影姫をめぐる平群の鮪と武烈天皇の争いなどに典  
 型として認められる。「うつせみ」とは「作者の立っている現在」なのであ  
 る。こうしてみて来ると、13長歌は、

香具山は 敵傍ををしと 耳成と 相争ひき

神代より かくにあるらし

古も 然にあれこそ

うつせみも 妻を 争ふらしき

と構成されていることがわかる。作者は「現在」の妻争いに立脚し、「神代」と  
 「古」に典拠を求め、そこに同化させることで心のカタルスを得ようとしてい  
 ると考えてさしつかえないと思われる。『万葉私記』が云うように当歌は「三山  
 伝説をよんでいる」とは言い難い。

### 三、反歌14番歌の語るもの

香具山と 耳成山と 相し時 立ちて 見に来し 印南国原

「香具山と 耳成山と 相し時」とは、長歌の「香具山は 敵傍ををしと 耳  
 成と 相争ひき」を捉え込んだものと見れる。「相し時」と「相争ひき」とは同  
 じ意味を示すと考えるべき。沢瀉『注釈』のように二通り別の意味に考えるのは  
 やはり難かしい。さて問題は次の「立ちて見に来し 印南国原」である。仙覚抄  
 が『播磨風土記』を引用して以来「立ちて見に来し」の主体は「阿菩大神」と考  
 えられて来たと言ってさしつかえない。近ごろ、それに疑問が投げられ、「印南国  
 原」が主体だと云われるようになった。前者は播磨国揖保郡「上阿」と印南国原は

三〇キロも離れている別の土地であること、文法上「立ちて見に来し」は「印南国原」にしかかからないこと、それに「阿菩大神」を語る何ものも当歌が持ちあわせていない事等を理由に考え直され、後者の説が出されたという次第である。ところで、両説とも現地印南国原がきっかけで作歌されたという共通し、「二山妻争い」を見に行つた主体が異なるという事は両者とも現地経験と「二山妻争い」の時腰をあげて見に来たという話の实在を前提にしていると云うことを暗黙のうちに示していると言える。ところがかかる諸説に対して、吉井巖氏は、荒木良雄氏の論を援用しながら、「印南国原」と歌われていること自体に於て、「いなぶ」は、「時代別国語大辞典」の云う如き「承知しない。ことわる。辞退する」意味だと見て、

…接近し、かつ類似する地名から、容易に妻を連想させる地名であった。とすれば、印南国原はそのまま歌の本意としては国原なる地名でありながら、特にこの地を呼びこんだ動機として、容易に心を靡かせなかつた妻という感慨が、作者の心情のなかに踏まえられていたと推定することができる。

と判断し「南毗都麻伝承」を引きあいに出す。ここまですべての当歌をめぐる研究経過であつたと云つてさしつかえあるまい。

私はここで当歌の指し示す二つの事柄即ち「香具山と耳成山と相し時立ちて見に来し」と「印南国原」から考えられる事として、先学とは多少異つた考察を試みたいと思う。それは13番長歌が既述の如く大倭地方に知られていた「三山の間に行われた妻争い」の伝説を「三角関係」の人間界に於ける普遍的現実と見なすかの如き根拠としてあげているという事実に基づいている。当歌作者がかかる事実として《古代社会に実在した妻争い伝説を新たな表現に應用しているという事は、古代の共同幻想を前提にした表現と見なす事ができる》ということな訳だから、当歌もその角度から見て行くことができると思うのである。そもそも「香具山と耳成山と相し時立ちて見に来し」とは当歌群の発想基盤に実在した「三山の間に行われた妻争い」伝説の一部であつたと考えてさしつかえない。というのは、前掲の「神皇起源譚」を逆にたどれば「三山相闘」に神の諫止が必要であつたこと、それに対し「阿菩大神」が「上来之時」、途中で「聞闕止」と言う記述から推考可能な、この「阿菩大神」以外に「諫止」せむとして「上来之時」神の存在したのであることがわかるからである。

『日本伝説集』にあげ、柳田・茂吉・西郷信綱等が引用している岩手県「甲池峯山・岩手山・姫神山」の「妻争い」は、仲裁をするものが無いため「この三

つの山」は「同時に晴れることは決して無く、争い続けていると云うし、人間世界の「古」例と見なしうる「影姫物語」に於いても武烈と鮪を取り持つ者が無かつたが為に一方が滅ぼされる結末となっている。近くにあつては「皇極三年正月紀」には中大兄が蘇我倉山田石川麻呂の長女を娶らうとして身狭臣に偷まれた時、形はかわるかもしれないが「少女（妹のこと）」が自分を替わりに出せとその父に話し、中臣鎌足等がその取りなしに入つたという伝えがある。これ等のことから考えれば、「神には神が」、「人には人が」という関係で仲裁者が立てば「聞」は「止」むと見る古代的な考え方があつたと推定できると思う。だから「香具山」は、敵傍ををしと耳成と相争そひし時に「諫止」せむとして「立ちて見に来」た神は「阿菩大神」以外にも存在したと考えることができるようになる。なぜなら「聞闕止」とあるからである。放つて置けば唾み合いが続いていたと考へても良からう。

このように見て来ると、《長歌、反歌の形式の中に、古伝承を分置して表現しようとする作者の在り様》が明らかとなる。

そうして「印南国原」である。前掲の吉井氏の考え方のうち、私は「南毗都麻伝承」を指摘する所に感を通じくする。

「景行記」には云う。

大帯日子淤期呂和氣の天皇、纏向の日代の宮にましまして、天の下治らしめしき。この天皇、吉備の臣の祖、若建吉備日子が女、名は針間の伊那毗の大郎女に娶ひて、生みませる御子、櫛津角別の王、次に大碓の命、次に小碓命またの名は倭男具那の命、次に倭根子の命、次に神櫛の王五柱。……ハ中略……また伊那毗の大郎女の弟、伊那毗の若郎女に娶ひて、生みませる御子、真若の王、次に日子人の大兄の王。

「景行記」にも同様の記事がある。この場合には「播磨の稲日大郎姫」と出て、「一に云ふ」として「稲日稚郎姫」とも記す。

一方「播磨国風土記」印南郡には次のような伝説がある。

郡の南の海中に小島あり。名を南毗都麻といふ。志我の高穴禰の宮に御宇しめしし天皇の御世、丸部臣等が始祖比古汝茅を遣りて、国の界を定めしめたまひき。

その時、吉備比古、吉備比売二人参迎へき。ここに、比古汝茅、吉備比売に娶ひて生める児、印南の別嬢、此の女の端正しきこと、当時に秀れたりき。その時、大帯日子の天皇、此の女に娶はむと欲して、下り幸行しき。別嬢聞きて、

即ち、件の嶋に遁げ度りて隠び居りき。故南毗都麻といふ。

周知の「南毗都麻伝説」である。同内容の多少入り組んだ話が、賀古郡にも伝わる。もちろん結末は「遂に度りて相遇ひたまひ、勅して『此の嶋の隠愛妻』とのりたまひき。仍りて南毗都麻と号く」とあり、「御舟と別嬢の舟と同一編合ひて度り」、「還りて印南の六継の村に到り、始めて密事を成したまひき」となっている。つまり求婚に際して一端は拒否されるが結果は円満にという型がここにはあるのだと思われる。云いかえれば、易々と靡いてはくれない相手故にその求め方も激しくなり、その結果も重視されると云う事なのではない。

以上の資料は、七二二年に成った『記』七二三年「撰進の命」の下った『風土記』七二〇年に成った『紀』による訳だが、いずれも七二〇年前後には成立していたものとみて良い。しかしその一つ一つの間に全く関わりがなかったかどうか。

人麻呂は「稲日野も行き過ぎがてに思へれば心恋しき可古の鳥見ゆ」(293番歌)と歌う。なぜ「行き過ぎがてに思」ったのだろうか。

紀伊の国に往き、勢の山を越えた時、丹比真人笠麻呂は「裨領中の懸けまく欲しき妹が名をこの勢の山に懸げばいかにあらむ」(295番歌)と歌い、春日蔵首老は和えて「宜しなへわが夫の君が負ひ来にしこの勢の山を妹とは喚ばじ」(296番歌)と歌っているが、ここに登場する丹比真人笠麻呂は筑紫に下る時、「……天離る 夷の国辺に 直向ふ 淡路を過ぎ、粟島を 背向に見つつ 朝なぎに 水の声呼び 夕なぎに 楫の音しつ 浪の上を い行きさぐくみ 磬の間をい行き廻ほり 稲日都麻 浦廻を過ぎて ……」と歌っている。

『続日本紀』神龜三年冬十月には、聖武天皇の印南野行幸が記され、その時供奉したとみられる笠金村には「三年丙寅の秋九月十五日、播磨の国印南の郡に幸しし」時の歌がある。赤人もこの時従った為に記されたのか、金村歌の次には赤人歌が「印南野」「印南都麻」等を歌い込んでいる。それに天平八年の遣新羅使の歌に「吾妹子が形見に見むを印南都麻白浪高みよそにかも見む」と歌っている。

このように「印南野」「印南都麻」が歌いつがれるという事から少なくとも人麻呂、笠麻呂のころには「印南野」をめぐる古伝承が何らかの形で存在したとみて良い。そうしてその地は「行き過ぎ」難き思いを喚起させ、「筑紫への途中、歌中に歌い込ませる」だけの価値を残し、新羅へ向う旅に於いては妻をしのぶ縁として定着させられ、蛭蛭と諸人の頭中に生き続けていたと見なし得る。西郷氏

の云う「古代生活」のなかの「共有の約束」は世代の交代毎の変容は経ていたであろうけれどもどこかでしっかりと機能していたと見るべきであろう。

ところで、人麻呂が「行き過ぎ難てに」思った事は何であろうか。古伝承としての南毗都麻伝説であろうか。あるいはすでに存在した「中大兄三山歌」の内容であったろうか。あるいはもともと近代的に見ること、即ち個人的な妻への思いでもあったろうか。あるいは又印南野の景色への関心でもあったろうか。あるいはそれらが重層してのイメージの世界でもあったろうか。

あるいは人麻呂が「加古の鳥見ゆ」と「稲日野」と共に「賀古」を歌いあげている理由は何であろうか。人麻呂の時代、播磨の南毗都麻伝説は周く都人の知る所となって歌に歌い込まれるだけの価値をもっていたと見るべきか。

ここで周知の記事であるが、皇極紀四年六月の記録を思いおこそう。大極殿に於ける入鹿暗殺の後の「蘇我臣蝦夷等、誅されむとして悉に天皇記・国記・珍宝を焼く。船史惠尺即ち疾く、焼かるる国記を取りて、中大兄に奉獻る」という条である。推古二十八年に編纂開始以来この時まで伝えられて来たものがこれを契機にして見直されたとしたらどうであろうか。古典大系本推古紀二十八年是歳頭注によれば「国記」とは「風土記」の類ではなく神代から推古朝に至る歴史だろうとのことだが、焼けてしまった「天皇記」が確実に「天皇の世系・事蹟等」であったにしても、『古事記』序文に云う「皇帝日繼」と「先代旧辞」の如きものを編纂するに足りるだけのものは伝わっていたと見られるから、先にあげた景行天皇の皇后が播磨伊那毗の大郎女であったという伝承は天皇家周辺には既成の事実として存在したと見る事ができる。あるいは「正実に近い、多く虚偽を加ふといへり」として「撰録」し「偽りを削り実を定め」た「帝紀」や「本辞」の類を、播磨の有力者が伝えていたと考えてもおもしろい。『播磨風土記』の古伝承に直結させても考え得るからだ。以上のように考えると、皇室の近辺に印南をめぐる何らかの意味での共通認識が存在したと認めることができる。

ところが、伊那毗とは、天皇家の系譜に入る以前の名称であるから、「イナビ」という言葉は天皇家にとっては他の氏族から入って来た言葉として、受容者の理解・解釈にその意味はゆだねられる。あるいは又播磨の国に於いても風土記撰進に際して賀古郡では景行天皇が「此の島は隠愛妻」と云ったので南毗都麻と名づけたと言ひ、印南郡では「別嬢聞きて、即ち、件の島に逃げ渡りて隠び居りき。故、南毗都麻といふ」と記しているように受容のし方に違いを来たす状況を呈している。

ではなぜ天皇の求婚に対し、相手は隠れたりするのか。ここで我々は雄略天皇にまつわる「春日の衰朽比売物語」を想起したい。

「雄略記」には云う。

天皇、丸邇の佐都紀の臣が女、衰朽比売を婚ひに、春日に幸行ましし時、媛女、道に逢ひて、すなはち幸行を見て、岡辺に逃げ隠りき。かれ御歌よみしたまへる、その御歌、

媛女の い隠る岡を 金組も 五百箇もがも 組き撥ぬるもの  
かれその岡に号つて、金組の岡と謂ふ。

この話の形は南毗都麻伝説に全く同じと見られる。地名起源説話の典型の一つとも見なし得よう。この中の「岡辺に逃げ隠りき」と、印南郡の伝説中にある「一件の嶋に逃げ渡りて隠び居りき」とは、天皇に求婚されてそのようにしたという点で全く同じことをしていることになる。どうやら古代の幻想の中に、求婚に際し拒否される天皇の定型があったと見て良いのではあるまいか。あるいは天皇と限定せずに「求婚者」としても良いかもしれない。そうして、一方では話に幅を持たせながら「容易に心を離かせなかつた妻」のイメージを形成して行ったものと思われる。要すれば、古伝承をふまえて歌をつくる程の作者であれば、当然のこと、今まで述べて来た程度のもは特にめずらしい事としてではなく周知の事としておさえていただろうと言うことである。「印南国原」とはだから、必ずしも現地の実体験を踏まえずには発し得ない表現とは言えないという事だ。表現の水準としては地名起源説話の水準にあるといっても良いかもしれない。西郷氏は「阿菩大神の神話を「共有の約束」として導入した訳だが、神皇地名起源説話と「三山歌」群は共に「大和三山間の妻争い」を根底に置いているということは言えても、どっちが先かについては断言できないはずだから、疑問とせざるを得ない。

#### 四、作者とは誰か

吉永氏は諸説無条件に中大兄が印南の地を訪れて作歌したと考えるのに対し、彼が印南の地を訪れた事は無いと断ずる。伊藤氏はそこで「船中」で歌ってもかまわないと云う。吉永氏の云う所は記録上の確証がないという事と、新羅遠征の日程から逆算して結論されたものである。景行天皇ゆかりの地として存在し、仲哀天皇西征にゆかりのある地として印南の地があったとすれば、そこで立ち寄って何がしかの事が行われたと考えるのもあながち無意味とは思えない。しかしそれなら記録に付されてしかるべきだろう。しかし全く見当らない。仲哀天皇のこ

とが皇室の伝承の中に入っていたとするなら、むしろ印南の地を避けたと見る理由付けもなし得る。なぜなら仲哀は朝鮮出兵に失敗した天皇だからである。ともあれ、中大兄は印南に立ち寄りなかつたことを見る吉永氏の考えはおもしろい。歌が実体験を基にしないと出来ないという考えを相対化するのに役立つからだ。それでは当歌群は中大兄の作とはならないということになるかもしれない。実はそうなのかもしれない。あるいはそうでないかもしれない。中西進氏の考え方もあるが実情は不明というしかあるまい。しかし、彼に托されている理由はわかるような気がする。

既に見て来たように長反歌ともに古代の伝承をふまえた歌である事を確認して来た。その結果として、「三山間の三角関係」の伝承と、三角関係に関わって、自己の欲求に素直にに応じてくれない相手の意味を相対化している人物であれば言語操作の上に登場させらる可能性はあると私は判断する。限られた紙幅で述べなければならぬので大雑把に云うしかないが、要は「茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」と「紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻故に吾恋ひめやも」にあると思われる。万葉編纂時の「天智、天武・額田」をめぐる觀念が根本にあつたろうという事だ。それに、『懐風藻』序文に見られる「淡海先帝」のイメージが加わる。これはもちろん漢詩文に関わるものだが、外国のものに関心を示す天智であつたればこそ「草創期」の作者の一人として後代の万葉編者等によつて「三山歌」作者と見られるようになったのだと考える。

#### 五、結び

問題の全てにふれられた訳ではないが、決まったように言われるいくつかの事も言外で相対化し得たと思う。額田王をめぐる中大兄の心の表現と一概に言えないことなど。

さて結論を述べるなら、当13・14番歌は、「倭三山間の妻争い」伝説を基盤にしなが、皇室周辺に存在した「帝紀」「本辭」の如き伝承物の中の地名起源譚を付加しつつ、先行するそれらの「伝説」を歌の表現方法として応用し、云われる如く「妻争い」の嘆きを歌い出したものと云えようかと思う。当歌が万葉の中に占める位置とはそこにあると考える。しかし又、かかる幻想性に負うている限りに於いて、言語表現としては自立し得ないという古代性も一面に於いて宿す結果となつたのだと思う。

なお15番歌にふれられなかったが、注(7)に述べた如く、左注の見解を重視し、

額田王歌とヘアーの歌として見るのが妥当だと思う。  
 なぜなら、額田王歌「潮もかなひぬ」の中には、それ以前の「月・潮」の好調を祈願する神祭りがあったと予想されるからだ。その時の歌として「今夜の月夜まさやかにこそ」であったと考える。そのようにみて両歌ははじめて動き出す。なお稿を改めて述べて見たいと思う。

- (1) 『校本万葉集』による。  
 (2) 『万葉集の比較文学的研究』114頁～118頁。  
 『万葉史の研究』170頁～171頁。その他。  
 (3) 『万葉集の歌人と作品上』184頁～「三山の歌」、『万葉私記』73頁～「天智天皇」。その他。  
 (4) 『万葉集注釈』(仙覚)、『管見』、『代匠記』、『考』、『略解』、『攻証』、『万葉集注釈』(澤瀉久敏)、『古義』、『亮々草紙』、『墨繩』、『楡燭手』、『美夫君志』、『万葉集新考』、『万葉集評釈』(佐佐木信綱)、『講義』、『中大兄三山歌評釈』(茂吉)、『全釈』、『万葉集評釈』(窪田空穂)、『万葉私記』、『古代和歌』、『万葉文学と歴史のあいだ』、『万葉集の歌人と作品上』。その他。  
 (5) 『万葉集注釈』(澤瀉久敏)に詳しい。  
 (6) 『万葉集注釈』(仙覚)以来、森重敏氏「三山歌と人麻呂」に至るまで、大方の人が阿善大神と見、森重敏・伊藤博・吉永登・吉井巖氏(「中大兄三山歌」)が印南國原とみている。  
 (7) 左注とのかかわりで疑問視されている。中西進氏は『万葉集の比較文学的研究』の中で「額田王の作」の可能性を考え、伊藤博氏『万葉集の歌人と作品上』は支持している。吉永登氏『万葉一通説を疑う』では「熟田津に船乗りせむと月までば…」の先に作歌された可能性を示し、「そこまで想像することは行過ぎである」と云うが、私はこの考えは正しいと考える。

- (8) 『万葉集の総合研究』第一輯。(長谷川如是閑の批判がある。)  
 (9) 『中大兄三山歌評釈』(斎藤茂吉全集第十三巻)  
 (10) 『菴馬漫語』(斎藤茂吉全集第三十七巻)  
 (11) 『口訳万葉集』(折口信夫全集第四巻)  
 (12) 『柳田國男著作集第二十三巻』53～54頁。  
 (13) 『万葉集の歌人と作品上』184頁。  
 (14) 『武烈紀』「武烈記」参照のこと。  
 (15) 『中大兄三山歌』(『万葉集を学ぶ』第一集)  
 (16) 『福日都麻・印南野考』(『国語国文』二巻四号)  
 (印)すれも前掲書。

(印)「立ちて見に来し」の主語を問う時、阿善大神説、印南國原説ともに「神皇地名起源譚」の在りように一つの仮説をもうけなければならなくなっている。前者は「攝保郡と印南郡は飾磨郡をはさんで東西にわかれる地形をなしているが、「両地に似たような話が伝えられてきたものと思はれる」(澤瀉『注釈』)のように、後者は「印南國原」にさような伝説が別途にあっても不思議はない」(伊藤博前掲書)というように。南毗都麻伝説が賀古郡と印南郡に伝えられていることから考えればあながち強引すぎるとも言えないが、南毗都麻島は賀古郡、印南郡の堺の海上にあることを無視すべきではない。前者・後者とも安易に過ぎるようと思われる。

- (16) 『万葉集巻六』985歌。  
 (17) 『万葉集巻十五』356歌。  
 (18) 『播磨風土記』によれば、印南郡の印南の由来は、仲哀天皇のクマソ征伐時、印南の浦に宿った際の海原の状態「波風和ぎ静けかりき」により「入浪の郡」と呼んだことにあるという。こうした伝説を根本として考えれば、景色の意味も捨てたものではなく、就も古代的な自然観は、草木官語のものであったことも十分考慮すると共に、古代の船旅の在り様も考えに入れるべきだろう。  
 (19) かかる仮説は(印)18と五十歩百歩かもしれない。ただ「安易」として批判する根拠を示したに過ぎない。又それが、二つの考え方を相対視し得るとも考えるものである。  
 (20) 『万葉私記』  
 (21) 吉永氏は『万葉一通説を疑う』52頁で「わたしは、かつて三山の歌は、斉明七年(六六二)西征の途上、播磨の海上にあって、国状を説明する播磨の国司たちによって印南國原にまつわる伝説が語られた際に作られたものでありと推定したことがあった。この考えは今も改める必要を認めていない」と云う。実体験を基礎に置く考えの一つとみならず、万葉集の中に於ける意味と一首の歌がいかに成立するかは論点を異にする。だから、当歌の万葉集の中に於ける意味は別途問われる必要のあるものと考える。  
 (脱稿 S 57・10・5)